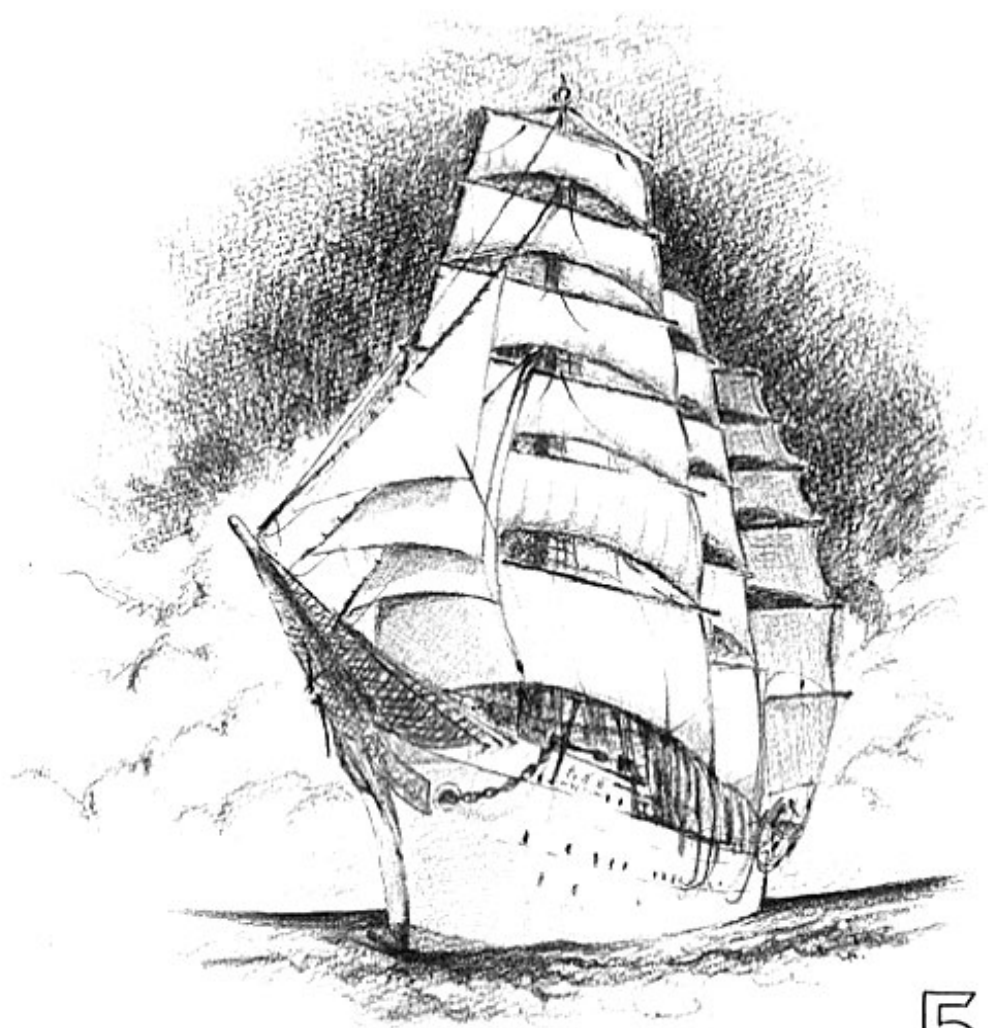


平成28年5月5日発行(毎月5日1日発行)
第56巻5月号(通巻682号)

風土



5

泰山木
神蔵器

燕来る木白作りの足鉋

まつさらな刻朝瀬の種を蒔く

竹の子の穂先の熱しとの曇り

山吹の十重に二十重にみろくさま

水のんで今日のはじまる鑑真忌

くわんおんや山藤なだれ滝をなす
谷ごとに寺谷ごとに夏鶯
雀来て孟宗竹の皮を脱ぐ
青梅の太る江の電軌むたび
わが家の家紋のごとく柿の花
流れゆく水をかくして揚羽翔つ
地にまこと天に泰山木咲けり



竹間集

同人作品



日向ぼこ

高村令子

百草に百の命や下萌ゆる
とこしへに生きる錯覚春の雪
ハミングを誘ふハモニカ梅日和
まばたきも密かな言葉すみれ草
匂探るも生きる力や青き踏む
生いたちは秘めしままなり牡丹の芽
飴舐めて余生ごまかす日向ぼこ

冴返る

土井三乙

鉄柱に止まり寒鴉の鳴かず
雪吊の天辺帽のごとき雪
ピアノ教授の小さき門や冬の薔薇
鬼は外吾がうしろより妻の声
豆打つも打たるもまた家人なる
春立つ日山々遠く居並びて
爪を剪る音のぱちりと冴返る

吉兆へ

根岸善行

立春の日差涙のごと溢れ
薄水の溶けゆくゆるく廻りつつ
浅春の月のかかりし梢かな
吉兆へ一心不乱鳥帰る
道に奥風にも奥や冴返る
辞めるより別れ淋しき春の雨
五六羽のからすの迷ふ春嵐

涅槃西風

林いづみ

バレンタインデー地球の裏にメール打つ
多喜二忌やカタカナ多き処方箋
言ひさして言葉のみ込む二月かな
身のどこか軋んでをりぬ亀鳴けり
浅春の膝に抜きぬるしつけ糸
拜殿の地下に銘水地虫出づ
涅槃西風手造り箸の馴染むなり

崑崙椿

小林共代

武家屋敷崑崙椿威を放つ
露の臺川を引き入る屋敷内
平城を包む内濠水温む
梅白し湯立神事の湯の袖に
四温晴れ犬吠埼に虚子の句碑
遠霞海に突き出す安房の山
五歳児に五歳児の夢風光る

日光写真

中根美保

ポケットに日光写真まだぬくき
風来れば水の底めき福寿草
走り根に箒目およぶ春社かな
継ぎてある狐の石座草青む
山笑ふひとつ出来たる草箒
瀬の浅くなれば歩みて春の鴨
羽搏きをつけて跳ねをり鴉の子

牡丹の芽

間島あきら

禅林の鎮もりの芯牡丹の芽
楕円なす急須の口や建国日
富士全容入るる北窓開きけり
二月の日差しを待てる木のベンチ
絮どこへ淡き四温の風に乗り
春満月くるぐる育つ木々の影
空領す構へに花の芽吹きかな

舟灯台

間島あきら

あおぞらの底に郡衙や梅開く
実橋にいにしえ香る郡衙の地
官道の身幅三間囀れり
志太とある木簡三寸冴返る
初蛙一つ鳴いては間を二つ
租庸調納めし道や草萌ゆる
たんぽぽの二輪郡衙の日溜まりに
青空にせせらぎ描く枝垂梅

旧道に沿ふ側道や花馬酔木
銅板に彫らるる宿図いぬふぐり
五十三次の板碑あかがね落つばき
初音かと仰げば聞こゆ山の寺
羽根搏つて春を呼び込む鷗二羽
浅春の全力檣の風力計
釣糸の円弧や春の日を割つて
波止に弧を画く放水春の富士
木蓮の大樹や津波避難場所
牡蠣殻の山に張り付く海苔の青
海道はこの先船路鳥帰る
舟灯台先のしぐるる弥生かな

山河集

同人作品



田村すゝむ選

あかときの傾く月に雪を搔く
きのふけふ同じ時刻に雪つのは
雪の町空の群青極まれり
名山も名も無き山も雪の中
小一時間母が逃亡寒ゆるむ

森屋慶基

語り部の眼鏡に燃ゆる春炬かな
あやとりの橋を崩して春を待つ
図書館に新刊匂ふ春隣
毘沙門堂の奥へ奥へと初音聞く
筧より春水光の棒となる

池田光子

霾るや信長地球儀を回す
ベルリンにひとりのバレンタインデー
青き踏む地球にアームストロング

豎山道助

見たきもの地球最後の日の海鼠
マルクスを捨てて畑打つ男かな

霞みけり山の機嫌の今一つ
折田京子

春の雪鏡に話す美容院
三月の今日より古希の日を賜ふ
春星の一等星追ふ誕生日
青き踏む万歩の彼方白き尾根

佐藤 恵子

コンテナ船巨大な口に風光る
大栈橋催事あまたや日永し
シーバスの汽笛千切れる春疾風
春光の町掻き混ぜるちんどん屋
寒戻るマンション保安パトロール

◇特別作品◇

故宮

岡本 尚子

白靴や台湾有情の地に立てり
はつ夏の定窯白磁に会ひにゆく
龍の吐く水浴びに来る小鳥かな
老鶯に台湾訛ありにけり
宮廷に鼎の軽重薄暑かな
列にゐる胸の高まり夏の朝
羅の双髻俑の迎へかな
炎昼や白磁は王者の色をして

白磁前夏服なん度遣り過ごす
青^{せい}白^{いはく}磁^くの蓮弁開く誘ひぬ
秘色とふ涼しき色の青磁かな
徽^き宗^{そう}帝の「雨過天晴」やソーダ水
秘色^{ひしき}に眸奪われしまま蟬しぐれ
注 徽宗帝の作らせた青磁の色を雨上がりの爽快な青空に譬えた言葉
汗血馬像夏空に嘶ける
夏旺弓手戦国馬手春秋
アイスティー四千年を呑み下す
傾国の至宝のこゑや誘蛾灯
月涼し徽宗乾隆の夢に触れ
故宮出で露店に頬ばる^{パンレイシ}釈迦頭
祖父入りし温泉^ゆのまだ在りて髪洗ふ

注 釈迦頭とは果物のこと(別名パンレイシ)

風土集



神蔵器選

雲一朶遠茜して西行忌 伊東 吉永すみれ

しやぼん玉天城の空を七彩に

梅日和半歩踏み出す伎芸芙

つばめ来る村の真中を川流れ

初蝶の海の広さを未だ知らず

かまくらを作る職人青ジャンパー 横手 森屋慶基

千灯し子等の影なき小かまくら

旅人に昼のかまくら灯しけり

切妻にとどく梵天干支飾り

蝦夷の血一氣に激す梵天衆

回転ドア街の余寒を裏返す 盛岡 石崎 浄

絵凧揚げ宇宙飛行士志望の子

春泥に摺まりゐたる禰宜木沓

雛壇の隨身弦なき弓を持つ

豆腐売り寒明け夕日連れてくる

雪を被て田の神行方くらませり 五條 上辻蒼人

足下より闇の深まる冬銀河

追儼会やどの鬼吠えも人の声

面取ればやさしき童鬼やらひ

びりびりと二月の風の肌を刺す

さまざまの蕾二月の風とどく 佐倉 松崎 雨休

玄関を出づれば旅路春の雪

「プロレタリア」厚き辞書引く多喜一の忌

洩垂れの頃の盟友路の臺

人は老い終の栖の梅若し

かみしもの優勝力士豆を撒く 川崎 森田節子

尖塔の十字きらりと春隣

黄水仙バスディケイキに名の三つ

水平に鷺の歩みや薄氷

春風や水のひかりの丸太橋